

③英語のネイティブスピーカー、又はそれに準じる方の部 最優秀賞

受賞者名： Darren Craig 様

能楽の国際化

私は5年にわたり、毎月のように夢中になって能楽を観てきた。その経験から、能楽は疑いようもなく世界のためにあるといえる。それでいて、囃子方の唸るような声や地謡のささやくような声、演者の舞のゆっくりとした足の運びは、まるで私たちを別世界に誘うかのようである。日本の伝統を深く内包した舞台と、異なる文化的背景を持つ観客をつなぐにはどのような「橋掛かり」が必要なのか。この中世の演劇形態を現代の舞台に昇華させるには、どんな活動が必要なのか。僭越ながら、提案をしたいと思います。

先ず私は、国立能楽堂とリチャード・エマート氏（※）とのコラボレーションに御礼を申し上げたい。細かい表現まで丁寧に訳されたエマート氏の英語詞章がなければ、私はここまで能楽に傾倒することはなかっただろう。西洋のミュージカルに馴染んだ観客にとって、能楽の上演方法がどれほど不思議なものに映るか過小評価してはならない。場面説明となる舞台装置は無いに等しく、登場人物の感情も、演者の抑制された動きに隠されてしまっている。詞章だけが、私たちを感情移入へと導く手段だが、日本の古文の基礎が十分になれば、名状しがたい暗喩の網に捕われてしまう。海外からの観客が、何の手助けもなしに、能「楊貴妃」の飾り気のない舞台を見て、地謡が謡う壮大な宮殿を思い浮かべられるだろうか。能の世界は不可思議である。しかし、観客が慣れ親しんでいる言葉でほんの少し手助けをするだけで、この不可思議さこそが魔法を帯びるのである。日本の古文に耳が慣れていない観客に能楽を真剣に見せようとするならば、私たちは詞章字幕の制作に真剣に注力すべきである。

二つ目のポイントは、番組に関するものである。能の曲は無数にあり、その中から海外の観客向けに1、2曲だけ選曲するのは大変な作業である。それでもなお、私たちは、能楽が、日本の歴史に深く根差したルーツを持つ一方で、世界に直に広がる枝をも持っているという事実を確信すべきである。能「鉄輪」― 結婚への裏切りと、それがもたらす悪魔的な傷みについてのこのメロドラマを見る度に、国は違っても同じように胸が痛むと気づかされる。同様に、もっと軽い、酒呑みの妖精を描いた祝の能「猩々」を見た時は、私は日本と世界の近さを強く確信した。世界に共通する人間性に焦点を当てることで、海外からの観客の共感を得られるような選曲が可能だ。

同時に、この試みにおいて、日本人そのものの参加を忘れてはならない。能楽師や能楽公演を主催する人々だけでなく、一般の日本人、特に若者のことである。世界で能楽への評価が熱烈で誠実なものになればなるほど、日本人の若者を能楽に惹き付けることができなければ、それは意味をなさない。これを、日本から世界に発信する大いなる熱狂、興味のともし火だとしよう。この炎にどうやって燃料をくべられるのか？何年も東京の大学で能の講義を行うことで培った答えの一つは、「伝統」という言葉について深く大胆な考察をすることである。この不安定な単語は、若い人々の注意を無理やり引こうと何度も使われてきたが、能楽の場合はこれでは不十分である。必要なのは、興味をそそるような新鮮な細部説明である。例えば、目付柱。何も教わっていなかったら、柱が、能面で視界が狭い能楽師が進行先を確認する目印となっており、それにより屋根だけでなく実演そのものを支えているのだと、誰が分かるだろう。面をつけた能楽師は、足を運び過ぎて舞台から落ちる危険に常にさらされている。ぐらっとしてぺしゃっと落ちるがごとく。私の教え子たちは、その意味を知ってはっと息をのみ、そしてくすくす笑った。それは畏怖や敬意からくるものではなかったが、確実に退屈してのものではなかった。

字幕、細やかな番組作り、そして日本人の若者によるサポートが、世界を能楽に導くだろう。

※リチャード・エマート氏：武蔵野大学教授、シアター能楽芸術監督